廣讃寺ジャーナル

第179号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
〈E-mail〉
matsuoka@kosanji.or.jp

安定とマンネリ

いろいろなアクシデントが続くと何もない安定した日が続けばいいと思い、何もない安定した日々が続くと今度はマンネリになってきて、このままたいしたこともなく私の人生は終わってしまうのか、私の人生こんなものか、と、こうなってしまいます。

今後の私にものすごい大きな幸せがあるとも思えず、ただ毎日を単調に過ごしています。

実はこれは闇の中にいる証拠なのです。闇の中というとすごく不幸で不安な時を指すと思いがちですが、むなしさを感じる日々を送るのも闇の中です。

ものすごい大きな幸せがあるとすれば仏さまに出あうこと以外にはないのです。出あったならばその瞬間より今までの人生とこれからの人生がすべてを喜んで受け入れられる身となります。

本願力にあひぬれば
むなしくすぐるひとぞなき

慶讃と報恩（2）

―宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年―

田中 智教

前号に引続き、標記のタイトルで綴ってみます。前号は特に「御誕生」について、今号は「立教開宗」について簡単に触れてみたいと思います。

そもそも、「立教開宗」ということは、教えを立てて宗旨を開いたということですね。しかし、多く語られるのは、親鸞聖人自身に宗旨を開く意思はなかったということです。有名な言葉としては『歎異抄』の「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」とあり、自身が一つの宗旨を開く開祖（当派の呼び名は宗祖）ではなく、実質弟子のように連れ添う人たちも同朋と見出しいく姿勢で法然上人（源空）を開祖的に仰いだということです。親鸞聖人ご制作の法然上人を想って詠われたご和讃に、

智慧光（ちえこう）のちからより
本師源空（ほんじげんくう）あらわれて
浄土真宗をひらきつつ
選択本願（せんじゃくほんがん）のべたまう　（聖典四九八頁）

とあります。一応、親鸞聖人からすれば、浄土真宗を開いたのは法然上人であり、あくまでも自身を宗祖として仰ぐ巨大な本願寺教団、浄土真宗各派ができるとは想像もしていなかったと思います。

一方、親鸞聖人を「ご開山」と称して仰いできた真宗門徒の姿が近年まで続いてきました。山を開くということは寺を開く、一宗を開くということでしょう。「浄土真宗」という言葉も法然上人ではなく親鸞聖人

の記述として残っています。そのことを思うと、親鸞聖人ご入滅から残された門弟たちによって脈々と引き継がれて今日まで、浄土真宗の「立教開宗」の祖として親鸞聖人を仰ぐ先人たちの営みに私も連なっていきたいと思うのです。

そこで、「立教開宗」の年を親鸞聖人の主著である『教行信証』の草稿本が完成したとされる説に基づいています。その『教行信証』の中に、

三時教を案ずれば、如来般涅槃の時代を勘うるに、周の第五の主、穆王五十一年壬申に当れり。その壬申より我が元仁元年甲申に至るまで、二千一百八十三歳なり。また『賢劫経』・『仁王経』・『涅槃』等の説に依るに、已にもって末法に入りて六百八十三歳なり。

（聖典360頁）

ここに「我が元仁元年」とあり、これが西暦で一二二四年、今年の二〇二三年で八〇〇年目の年になり、一一七三年から御誕生八五〇年と合わせてお慶びしましょうというのが、このたびの大法要となったわけです。「立教開宗」という親鸞聖人が立てた教えに私たちが立ちかえることの重要性と同時に、現に私たちがその教えを聞くことができたと慶びを実感していくことも大切であろうと思います。

帰敬式

学生時代は入学式、卒業式を何度か経験しました。そこから社会に出れば入社式、結婚すれば結婚式などがあります。しかしそこからは自分自身にとっての「式」というものがあまりありません。退職式というのもあるらしいのですが、それもないところもあります。そうすると本当に自分の葬式まで自分の「式」というものはないのかと考えてしまいます。

帰敬式というものがあります。今日、たった今から仏道を歩んでいくのだという決意をする式です。廣讃寺門徒さんも廣讃寺本堂で百人近くのかたが受けています。

コロナで随分と執り行っておりませんが、またいつか再開したいと思っております。次の式は自分の葬式だ、と思われている人へ、その前に人生を見直し新しい道を切りひらく帰敬式をお勧めいたします。

令和五年（2023年）年忌表

年回	年回にあたる没年
一周忌	令和4年（2022年）
三回忌	平成33年（2021年）
七回忌	平成29年（2017年）
十三回忌	平成23年（2011年）
十七回忌	平成19年（2007年）
二十三回忌	平成13年（2001年）
二十七回忌	平成9年（1997年）
三十三回忌	平成3年（1991年）
三十七回忌	昭和62年（1987年）
四十三回忌	昭和56年（1981年）
四十七回忌	昭和52年（1977年）
五十回忌	昭和49年（1974年）

行事予定

二月二十八日（火）十時　親鸞聖人ご命日のお勤め